

MAJ NEWS

John Milton

Volume 3

2011

The Milton Association of Japan

MAJ News

Volume 3

2011

The Milton Association of Japan

Editorial Board

Editor-in-Chief: Katsuhiro Engetsu

Editors: Yuko Noro, Go Togashi

Contents

第3回 研究大会 発表要旨

Proceedings of the Third Annual Conference

1-6

シンポジウム **Symposium**

「ミルトンの言葉（で）」

1-5

Milton, Dryden, Pope と ‘Chequer’d shade’

岡 照雄

1

ミルトンとイギリス・ロマン派

森松 健介

3

「汝自身を知れ」

—ミルトンの言語認識と自己認識—

桂山 康司

4

恋に落ちないミルトン

川島 伸博

5

研究発表

Papers

6

セイタンの味方が否か

—『失樂園』における混沌の描写をめぐって—

江藤 あさじ

6

『失樂園』における預言
—新しい世界の創造—
川崎 和基
6

第4回 研究会 発表要旨
Proceedings of the Fourth Colloquium
7-10

ミルトンと音楽
—対位法をめぐって—
倉恒 澄子
7

ふりだしにもどる
—Sonnet XVI (“When I consider how my light is spent”) 熟読—
富樫 剛
10

第5回 研究会 発表要旨
Proceedings of the Fifth Colloquium
11-14

ミルトン痛苦の発声
—『政治権力について』—
小林 七実
11

〈知恵〉をめぐって
—ミルトン『失樂園』第7巻からワーズワスへの啓発—
水野 薫
13

日本ミルトン協会規約

The Articles of Organization of the Milton Association of Japan

15-18

Proceedings of the Third Annual Conference
Ferris University, October 23, 2010

シンポジウム
Symposium
「ミルトンの言葉（で）」

Milton, Dryden, Pope と ‘Chequer’d shade’

岡 照雄

Alexander Pope, *The Dunciad* 第四巻は、混沌と暗闇に向かったの、「ほんの一瞬でも、鈍い光の一条でもよい、どうか ‘darkness visible’ を恵み給え」という懇願ではじまる。その薄暗がりのなかで、さまざまな愚者、なかでも文献学者や三文詩人らが活動、暗躍し、巻末では何も見えぬ真の暗闇、‘Universal Darkness’ の支配が確立する。その途上で使われるのが ‘chequer’d shade’ で、Milton, *L’Allegro*, 95-96 に基づくことは、ポープの注釈者が早くから指摘していた。『ダンシアッド』のその箇所は次の通りである。

And you, my Critics! In the chequer’d shade,
Admit new light thro’ holes yourselves have made. (*The Dunciad*, IV, 125-26)

ポープが嫌う愚かで銜学的な文献学者が古典作家のテキストを恣意的に改竄し、紙面に無数の穴を開けたために、その穴を通して射し込む木漏れ陽は地面にも白黒の穴模様をつくった。ここには、一般の詩人、批評家の書き物も含まれている。エセ文献学者の頭のなかは、木洩れ陽の射す薄暗がりで、普段は美しい地面の紋様は、古典文学の校訂と称して彼らが傷つけた本文の姿、自称詩人の詩文を記したきたない原稿用紙になった。しかも、この薄暗がりはやがて真の闇になる。そもそも、彼らの頭蓋骨を通過して射し込むのは僅か数条の光線だけで、古典・新文学を照らす光明になる見込みはない。「わが身内の／暗いものを照らし、低いものと高めてささえよ」（宮西光雄訳）という願いは空しい。身内に闇が迫り、文学の品位はますます低くなる。『ダンシアッド』の ‘Chequer’d Shade’ はそういうストーリーを支えることばのひとつである。

ポープに先行する John Dryden がその作 *MacFlecknoe* で同様の趣向をすでに試みている。物語の発端は、三流詩人と目されるフレックノーが老いと衰えを感じて後継者を選ぶ場面である。もっとも愚かな詩人に後を継がせたいと詩壇を見回すと、いちばんの適任者は Thomas Shadwell である、と気付く。さて、そのシャドウェルだが、

Some beams of wit on other souls may fall,
Strike through, and make a lucid interval;
But Shadwell’s genuine night admits no ray;
His rising fogs prevails upon the day. (*MacFlecknoe*, 21-23)

普通の詩人ならウィットの光が二、三のラインとなって、固い頭の骨の抵抗を排して脳内に入り、束の間でもまだらの薄明かりをもたらすが、シャドウエルの頭は光線を拒否し、立ち上る濃霧が陽光を遮断する。この人こそ申し分ない我が跡継ぎだ、と。‘Chequer’d shade’は詩才、ウィットのない詩人の頭の風景に転用された。

引証文献

Dryden, John. *John Dryden*. Ed. Keith Walker. Oxford, 1987.

Pope, Alexander. *The Dunciad*. Ed. James Sutherland. Methuen, 1965.

森松 健介

ロマン派（以下 R と表記）の時代に至るまでに学童から作家までが『失樂園』（以下 PL）に馴染んでいた。ミルトン（以下 M）の短詩・散文諸論文も R に大きく影響。M 的 blank verse がその後の諸作品へと受け継がれ、長編詩の伝統が R の中にできた。M も R もともに革命の時代を生きた。R も仏革命当時には全員が革命に賛同し、M を師表と仰いだ。M は反権力的だったから PL の Satan を権力に対抗する R 的ヒーローと見る新解釈が多く、詩人の賛同を得、Godwin に至っては Satan を既成権力・神への抵抗の symbol と見た。

R 詩人たちの M への傾倒を羅列すれば、Gray は M の反骨精神を継承し、Cowper は M を尊敬し、注釈付の PL を出版するつもりだった。Hayley は、出版を拒否された M の伝記を穏健化して出版。Blake は R 詩人中最大の影響を受け、M の作品を熟知し挿絵を制作、抒情詩『ミルトン』を書いた。女流 Charlotte Smith と Helen Maria Williams も「沈思の人」を受け継いだ。Wordsworth は“Milton! Thou should'st be living at this hour: England hath need of thee”と歌ったし、Prelude に M の影響が大きいことは一目瞭然。Coleridge も暴政批判者としての M の助力を求めた。Lamb は PL の完全性を絶賛し、Hazlitt は R らしい Satan への讃辞を捧げ、L. Hunt は『コウマス』冒頭部を絶賛し、De Quincey も PL を高く評価、Byron は M の崇高な韻律を褒めた。Shelley の *Queen Mab* の空から地球を眺める趣向は PL の応用で、また *A Defence of Poetry* では“Milton stood alone illuminating an age unworthy of him”をはじめ、この詩論の各所に M を持ち出した。Keats は M が全人類の友・味方だとし、“*Paradise Lost every day becomes greater wonders to me*”と書いた。Mary Shelley の *Frankenstein* も M 的だとされている。

ブレイク（以下 B）に集中して言うなら、彼は反体制的預言者としての M に酷似する詩人だ。B は M の sublime personification（最大の例：Satan と Sin, Death）を継承。他の人から「流出」して誕生する B の人物は Sin, Death の応用だ。女 Sin が父 Satan と同衾して生まれた息子が Death だが、M によるこの人物の造形が B の人物の奇怪な姿の先取りであるとともに、近親相姦による出生もまた B には模範となる。またこの永遠界では美形だった女が Satan と同時に「墮落」した地獄では、外観も内実も変形した別人格で、その名も〈罪〉となっているのも、B の「人物」たちが永遠界での名と「墮落」した物質界での名を別々に持ち、別人格として固有の精神内容を示す考案を促したものと言える。さらに PL の母〈罪〉と息子〈死〉は頻りに近親相姦を重ね、毎時間母は懐胎し、毎時間子が生まれ、子等は都合によっては母の子宮に隠れ、避難する。これは B における出生の超自然的・超時間的様態と共通する。人物が他の人物の肉体に避難する情景も B に頻出する。

次に M と B の弁証法：相反物の対置による止揚＝読者の想像力の喚起。“Without Contraries is no progression”という B の言葉は「異質なものの混交あって初めて変化が生じる」と述べた M の継承。その好例は B の『無垢の歌』と『経験の歌』という異質な世界の対照と協働だ。これらの詩を、富者の好む形で書きはしない、権力の中枢から離れた詩人として書くという B の宣言も M を受け継ぐ。そして『無垢の歌』では、自然の中＝理想界の中に子どもを置く一方で、『経験』の扉絵で子どもを現実の中に連れ込むのが M 的な対置法である。やがて B は M の助力を得てアルピオン（＝イギリス、そして人類）を救済する態勢を整える抒情詩『ミルトン』を序曲的に書き、次に瀕死のアルピオンが実際に救い出される本編的抒情詩『エルサレム』を書くが、M の導きによる執筆だったことは明白だ。

短時間で具体的に話すため B に例を採ったが、他の R 詩人も M の影響下に作品を書いた。

「汝自身を知れ」
——ミルトンの言語認識と自己認識——

桂山康司

曖昧は、単に言語のコミュニケーションの道具としての不備を示す特質とは決めつけられず、むしろ、対象が人生といった、そもそもが不分明さを伴う、曖昧な対象の、あるがままの姿を伝えるものとして活用しうるものであるとの画期的なエンプソンの指摘に対して、ミルトンはどこまで、言語に内在する曖昧の、詩的表現への活用を意識的に行っていたのであろうか。

These, lulled by nightingales, embracing slept,
And on their naked limbs the flowery roof
Showered roses, which the morn repaired. Sleep on,
Blest pair! and, O! yet happiest, if ye seek
No happier state, and know to know no more!

(*Paradise Lost*, IV, 771-5)

(この二人は違って、^{ナイチンゲール}小夜啼鳥の歌声を子守唄に、抱きあいながら眠る。
そして、そのむき出しの肢体には花の天井から
薔薇の雨が降り注ぎ、朝になればまた元に戻るのだ。眠るがよい、
祝福されたる夫婦よ！それに、ああ！これほど幸せな二人はいなかったものを！もし
更なる幸福を求めて、更に知りたいと思わずに、分を弁えておりさえすれば。)

775 行目における、音声上の効果には際立ったものが認められる。第3詩脚と第4詩脚の強勢音節に‘know’「知る」を繰り返した言い回しは、他ならぬ‘to know’「知ること」それ自体の観念がこの作品にとって重要な意味を持つことを暗示しており、この作品が、古典以来の重要なトポスである‘know thyself’「汝自身を知れ」に連なる作品であることが分かる。また、enjambement であることから、行頭の否定辞の‘no’には自然と強勢が落ち、次の語の‘happier’もまた強勢を要求する語であるがゆえに、自然と‘no happier’は全体として大きな強勢を持ち焦点化され、同時に焦点化の起こる行末には、同種の文法上の構成、「否定辞‘no’+比較級」を持つ‘no more’があることから、この行頭、行末の呼応が意識され、また、行中央におけるもう一つの[nou] (‘know’「知る」)の繰り返しにより、この行の眼目である[nou]という音声のもつ曖昧さ——否定辞の‘no’は「知る」の‘know’に通じる——が焦点化されて‘seek no happier state’は直ちに‘seek, know happier state’を喚起する。更に、‘no more’「これ以上はだめだ」なる言い回しは、直ちに‘Know more!’「このままではだめだ、もっと知れ」に墮する可能性があり、その意味で、この詩行はアイロニカルな響きを多分に有し、言語の曖昧性に起因する不安定さこそが、この物語を悲劇的大団円(catastrophe)へと導く動因であることが示唆されている。そうなってはならぬと願いつつ——この二つの同音異義なる語の差異を弁え、この一文を正しく理解してほしいと願いつつ——それがかなえられぬであろうことを誰よりも痛切な思いでかみしめながら、この詩行をあえて曖昧にゆだねた詩人は、言葉の恐ろしさを知りつくした経験者(a sadder and a wiser man)であった。

恋に落ちないミルトン

川島 伸博

本論は虚構としてのミルトン伝の系譜に整理し、そこで利用される「ミルトンの言葉」に焦点をあてる。擬似ミルトン伝は、Blakeの予言的叙事詩 *Milton* に始まり、Bulwer-Lyttonの“Milton”が続く。ヴィクトリア朝には Anne Manningによる小説 *The Maiden and Married Life of Mary Powell*, 第二次大戦中には Robert Gravesの *Wife to Mr. Milton* が出版され、前世紀紀末にも Peter Ackroydの *Milton in America* が出ている。

マニングの小説(1855)はミルトンの妻メアリ・パウエルの日記という体裁である。ミルトンはあくまでもすぐれた詩人であり、その偉大さを示すため、彼の詩句が直接引用され、その詩句にメアリが感服する場面が描かれている。グレイヴズの小説(1942)はマニングの描いたメアリ像を反転させることで、強烈なミルトン批判を展開する。ここで中心的に描かれるのは、愚直な夫に苦しみつつも自立するメアリの姿であり、「ミルトンの言葉」はもはや崇拜されず、引用されることなく徹底的に批判される。アクロイドの小説(1996)は「王政復古時ミルトンがアメリカへ逃亡していたとしたら」という仮定のもとに書かれている。苛酷な環境の中、新天地のミルトンは偏屈さを増し、最後はカトリック教徒のコロニーを軍事力で破壊する。この作品では「ミルトンの言葉」がパロディ化される。しかも、ミルトンには自分の言葉に酔う傾向があると批判される。

擬似ミルトン伝の系譜における「ミルトンの言葉」の受容の変遷、すなわちマニングによる崇拜からグレイヴズの拒絶を経て、アクロイドの矮小化へと至る過程は、今日における「ミルトンの言葉」の位置の変遷を要約しているように思われる。そこに、ある程度の力を認めつつも、素直に崇拜することはためらわれ、かといって拒絶するほどのものでもなく、うまく利用できる源泉としての「ミルトンの言葉」。この過程が、ポウプにおける矮小化、ジョンソンにおける拒絶、ロマン派における崇拜というミルトン批評の流れを逆行している点も興味深い。

それにしても、キャラクタとしてのミルトンは「恋に落ちない」。グレイヴズはそれを補うために Mun という男性を登場させ、メアリと恋に落ちさせる。アクロイドのミルトンは自分の町の法律を作るが、その中には「路上で女性にキスするところをみられたら鞭打ちの刑」というのがある。マニングにはそれらしき描写もあるが、彼女のミルトンがメアリに恋愛的感情を抱くのは、メアリが自分の詩句を口にするときだけである。本論はブルワー・リットンの詩「ミルトン」に引用される「イタリア貴婦人伝説」を手がかりに、ミルトン自身の詩句に戻り、擬似ミルトン伝においてミルトンが恋に落ちない原因を考察する。

「ソネット 19 番」は、ミルトンの妻に対する想いが発露した作品と考えられているが、そこで「抱きしめる」の主体は詩人ではなく亡き妻である。詩人は、恋愛において主体的ではなく、あくまでも受身なのである。恋愛において受身的で、恋に落ちないミルトンは、「快活の人」、「沈思の人」におけるマーロウの詩句(“If these delights thy mind may move; / Then live with me, and be my love”)の書き換えに象徴される。「快活の人」は “These delights, if thou canst give, / Mirth with thee, I mean to live”, 「沈思の人」は “These pleasures Melancholy give, / And I with thee will choose to live”, それぞれ女神への嘆願で終わる。マーロウの詩では「喜び」を与えるのが男性であったのに対し、ミルトンの詩では女性が「喜び」を与えるのである。

研究発表 Papers

セイタンの味方か否か
——『失樂園』における混沌の描写をめぐって——

江藤 あさじ

『失樂園』に登場する「混沌」はセイタンの味方か否か。そのような質問を投げかけたくなるほど、混沌の描かれ方は両義的である。『失樂園』では、天国と楽園は光の地、混沌と地獄は闇の地として描かれている。混沌の世界は「混沌」と「夜」と「偶然」に統治されており、原子が絶えず繰り返す争いで混乱に満ちている。闇の世界に落とされたセイタンは、光の世界を目指す途中、そのような混乱の世界に突入するのだ。初めて混沌の世界を目の当たりにしたセイタンは、その様子から、混沌は神と対立する存在であるとみなす。続くセイタンと「混沌」との間で繰り広げられる会話は、「混沌」によって発せられる解釈の難解な箇所があるものの、読者に光の世界と闇の世界の対立を一層強く印象づけることになる。

ミルトンは、『失樂園』においても、『キリスト教教義論』においても、物質を悪とみなす二元論的解釈に異論を唱えている。それなのに、ここでのミルトンは、グノーシス主義さながらの二元論的世界を故意に描いているように思われるのである。それは何故なのか。ひとつはセイタンを錯覚させるため、そしてそれと同時に読者を錯覚させるためであろう。これは、後にそれが錯覚であるということが分かった時に、一層ミルトンが言わんとすること、すなわち、グノーシス主義的な二元論の世界は存在せず、混沌は決してセイタンの味方ではない、ということを確認する効果があると考えられる。そしてもうひとつは、人間の自由意思に関するミルトンの思いを描き出すためではないかと推察される。勿論それは、物質と精神を切り離さないという神学的なレベルの話にもなるのだが、もっと身近な、人間の複雑で不安定な思考やその発露といったものが混沌の世界の混乱に反映されているように思われるのである。セイタンの邪心や苦悩は、人間ミルトンの脳裏に浮かびあがって描き出されたものであり、そしてまた多くの人間が経験し、味わうものでもある。なぜ人間は、時として邪悪な妄想にふけったりしてしまうのか。また、それにもかかわらず正しく生きたいという欲求はどこから生まれてくるのか。ミルトンがこのようなことを考えて『失樂園』を書いていたかどうかはわからない。しかしミルトンの描く混沌の世界は、そういったことにたいする答えを与えてくれているように思われるのだ。

『失樂園』における預言
——新しい世界の創造——

川崎 和基

Proceedings of the Fourth Colloquium of MAJ
Osaka Gakuin University, July 3, 2010

ミルトンと音楽
——対位法をめぐって——

倉恒 澄子

Milton と音楽をめぐり研究は少なからず刊行されているが、ここでは特に、Milton と、宗教的音楽における対位法の盛衰についての関係を取り上げる。

一例として取り上げるのは、*Paradise Lost* [PL] 第二巻において、墮天使たちが奏でる音楽の描写である。

Their song was partial, but the harmony
(What could it less when spirits immortal sing?)
Suspended hell, and took with ravishment
The thronging audience. (PL 2. 552-55)

墮天使たちは自分たちの反逆を英雄的な行為とみなし、地獄へ落とされた処遇を嘆いている。その彼らの歌う歌は“partial”だと詩人はいう。Stephen M. Buhler は *Milton Studies*, vol. 36 (1998) に掲載された論文“Counterpoint and Controversy: Milton and the Critiques of Polyphonic Music”において、この“partial”という形容詞に対して、「身勝手な、偏った」という意味のほか「多声部からなる、ポリフォニーの」という解釈が読み取れると論じた。Buhler の指摘では、この描写はポリフォニーを墮天使と結びつけることによって、当時の論争となっていた音楽と言葉との関係、ひいては音楽と“the Word”すなわち御子ないしは神との関係に対しても、詩人 Milton は自らの立場をあらわにしているのだという。確かに、Alastair Fowler も *John Milton: Paradise Lost* において、この個所の“partial”に“polyphonic”という注釈を付記した。しかし、Buhler の論文発表と同年に出版された同書第二版では、併記されていた“polyphonic”という解釈は消えて“prejudiced”という解釈だけが記載されている。Buhler 的読み方への道は狭まった格好であるが、PL 第二巻のこの個所で歌の効果を語った述語部分、すなわち、「聴き手の心を魅了した」という描写を見ると、Buhler の言わんとした意図も腑に落ちる。というのも、Milton が踏まえてきた時代にはポリフォニーという音楽様式が問題視されるようになっていたからである。なお、そのポリフォニー——すなわち複数の声部がそれぞれの旋律の独自性を保ちつつ協和しあって進行する音楽様式——という呼び方は、のちの 18 世紀以降になって、主旋律がありそれに対して和音が添えられる形のホモフォニーの様式が隆盛をみせてくるのに伴って、それとの対比として使用が多くなってきた呼称であり、それ以前の時代にはもっぱら、ポリフォニーを作る際の技法である counterpoint (対位法)、あるいは、その高音声部を表した、descant / discant などの用語がそのまま総称としても用いられていた。

さて、その対位法ないしはポリフォニーが問題視されたのはなぜか。音楽というものは、古代ギリシア時代から単なる娯楽に留まらない効能が注目されていた。たとえば Plato の *The Republic* においても、音楽の教育効果が Socrates によって論じられるくだりがある。すなわち、人の魂の品性はその人が何をどのように語るかとも連動するので、若者を教育するには優れた調べ、優れたリズムのもつ傾向に馴染むよう導くことが求められ、そして、教育上望ましい音律として、勇氣

を表現する「ドリス調」(Dorian)と節度を表現する「プリュギア調」(Phrygian)が奨励されている。Milton自身は、*Areopagitica*においては、このような選別は検閲につながりうるものとして警戒しているが、しかし、*PL*冒頭で墮天使らが「ドリア調の音楽に合わせて」(“to the Dorian mood”) (*PL* 1.550) 勇壮に行軍する描写は、Dian McColley が言うようにこの伝統にのっとった音階選択である。

このような教育や心身の健康への効能のみならず、キリスト教教会においては、音楽そのものが神との強い関係性を担っていた。歌である詩編を始め、信仰の集いでは聖書の文言は声に出して歌われ、語られるものであった。その音声化において、放縦や恣意的解釈を避け、また会衆の唱和を目指すには、ある程度音楽的に固定された朗誦が必要となる。しかし、9-10世紀初頭に記されたとされる音楽資料には、単旋律のグレゴリオ聖歌に対して、四度あるいは五度などの幅で平行して移動する旋律、あるいはもう少し自由な動きを見せる旋律が記されており、これがポリフォニーの記述の最古のものとされる。もともとの単旋律のグレゴリオ聖歌をそのまま歌う者と、そこに補足説明のように、あるいは解説のように、関連する文言を差し挟む者として、合わせて複旋律で朗誦していたと思われる記載がみられてくるのである。こういった装飾的な技巧は、神聖な典礼文に恣意的な脚色を付与せずに堅持する必要と、かつその典礼主文を解釈し補足する必要との双方に配慮するために生じたと考えられる。この多声的な技巧は徐々に独自性を高めてゆき、ルネサンス期には隆盛を極めた。しかし、あまりに自由になりすぎたため批判を呼ぶこととなる。

Martin Luther は、1517年に免罪符乱売に対して95個条の抗議書を表わし、これを契機として宗教改革の波が広がったが、彼は聖書のドイツ語訳も行ない、自ら多くの賛美歌を作り、音楽を含めた典礼改革につながる文章を記した。彼は人々が理解しやすいよう本国語を重視したが、ラテン語の典礼文や音楽を全面否定したわけではなかった。しかし、Huldrych Zwingliによって南ドイツに広がった改革運動では、儀式批判の気運の高まりと共に、従来教会の歌は排除されてゆく。Zwingliは音楽家でもあったが、運動の進展と共に1524年には大聖堂のオルガンがカトリックの象徴的楽器とみなされて解体される事態となり、これが他の教会へもオルガン破壊運動として連鎖してゆく。さらに、聖書のみを拠りどころとすることをうたうJean Calvinの改革にあつては、音楽を始めカトリック的な要素の排除はさらに進む。宗教改革の推進力の基盤には、理解できる礼拝や意味のわかる言葉によって神との結びつきを身近に感じたい人々の欲求が存在した。この大きなうねりを迎えてカトリック教会側からなされた対応がトレント公会議(1545-63)である。会議では教会音楽も俎上に載せられ、ポリフォニーを全面禁止して単旋律のグレゴリオ聖歌のみを残すべきかという強硬意見も出たが、結局複雑で技巧的すぎる非聖書的装飾部分や、歌詞を不明瞭にする過剰なポリフォニーのみが制限ないし禁止されることになる。ポリフォニーという様式は、改革側からもカトリック教会側からも、過剰な不要物の疑惑を帯びた、扱いの難しい存在になっていたわけである。

イングランドでは、カトリックの影響を強く残すアングリカン・チャーチが1549年から *The Book of Common Prayer* を制定し、中世来の教会の聖歌とラテン語ポリフォニー音楽を否定したが、聖書の記述のみに基づいた根本的改革を望むピューリタンたちはこれに満足せず、典礼儀式の廃止、聖歌隊の解散、オルガンの解体、教会音楽全般の禁止へと向かうのだった。しかし、ピューリタンは、音楽をすべて禁止したのではなく、健全な娯楽として問題のない場合は逆に奨励した。

ではMilton自身はどうだったのか。前述のBuhlerにおいては、墮天使たちの奏でるポリフォニーは、和声としては聴衆を魅了したが歌詞は十分には聞き分けられず、そもそも歌詞の内容に独善的な偏りがあった、と解釈する読み方が示されていた。そしてBuhlerによると、そのような不完全な音楽を墮天使たちに演奏させることによって、この描写には、これまで歌詞(ひいては“the Word”)をきちんと聞き取れないようなポリフォニー音楽に耽溺してきた反ピューリタン勢力への

批判があるという。また、たとえば *A Masque Presented at Ludlow Castle* において、Circe たちが四人で歌う歌は対位法に基づく音楽（ひいては典礼的な四声の賛美歌）を連想させ、一方 Lady が澄んだ声で歌う音は単旋律の monody ということになる。Comus は独白において、Circe の歌は聞く者を忘我の境地へとさらってゆくものだが Lady の歌を聞くと覚醒した明晰な喜びを覚える、と語るのも、Buhler はここに、混乱を引き起こすポリフォニーと、「理性」であり「言葉」である Logos との対照が描かれていると見る。Lady の歌の結びにおいて、原稿では “And hold a counterpoint to all heaven’s harmonies.” であった詩行（Milton の詩文・散文中で見受けられる唯一の “counterpoint” 使用例）が出版時には “And give resounding grace to all heaven’s harmonies” と改変されているのも、ポリフォニーの技法である「対位法」という用語を Milton が避けたのだと Buhler は考える。ただし、変更の理由は明示されていないため、単に上演の都合上などという別の理由の可能性はある。実際に、この仮面劇の結末で守護天使が示す、人間の “virtue” の上下に対応して天が寄り添って動いてくれる、という慈悲深い関係は、それを図式化するならば音と音に対応して平行して動く対位法の仕組みにも似ているのである。

Milton の作品中でポリフォニーと非ポリフォニーの対立・対象を描いているようにとれる描写は少なくない。Sandra Corse は “L’Allegro” と “Il Penseroso” をそれぞれ、新たに発達してきた単旋律音楽モノディ (monody) と伝統的なポリフォニーを指しているとみなす。複旋律のために歌詞が不鮮明になっていたポリフォニーの弊害を改善するために、古代ギリシアの演劇を想起させるような、音楽をあくまで言葉の意味に従属させる様式としてのモノディという様式が現れてきたが、この対となる二作品はその対照を示している、というのである。しかしこれに対して John Carey は、そもそも Milton は音楽が理性を曇らせかねない力をもつことを懸念しており、言葉に対するほどには音楽に信頼をおくことができないでいる、と考える。McColley のように Milton の作風自体に複雑なポリフォニー的要素をみる見方もある。“At a Solemn Music” は作品自体が、現世では実現の難しい理想のポリフォニーへの憧れを語っているようである。結局 Milton にとって、ポリフォニーは懸念の対象ではあっても、忌避の対象に限定されているとはいえない。完璧な音楽を作ることができない、あるいは聞き取ることができない、あるいはそんな対象に理性を忘れて惑溺してしまう人間の不完全さが問題なのであろう。冒頭に挙げた PL での墮天使の歌にせよ、Comus が惹かれた Circe の歌にせよ、それが咎められる時には聞き手の理性の弱さが共に描写されているのが示唆的である。

富樫 剛

本論考は、英文学を含む文学研究の現状について概観、考察し、そしてイギリス詩研究に関して、音声分析も含めたていねいな読解と解説への回帰を主張したものである。

特に後者の音声分析については、まず、ネイティブ英語話者による朗読音声を音声解析ソフトウェア Praat によって視覚化し、それをもとに Leech, Hobsbaum, Attridge and Carper など、従来のスキャンジョンの有効性を問うた。そしてそこから、詩のスキャンジョンにおいては、各音節が強いかわい、各語が内容語（名詞、動詞、形容詞、副詞）か、それとも機能語（代名詞、助動詞、接続詞、前置詞、冠詞など）か、という二項対立で考えるべき、という結論を導いた。

また、詩における言葉の音の利用法として、Spenser, *Faerie Queene* 第一巻、Archimago が作った Una の幻影が Redcross を誘惑する場面、および Richard Crashaw, “On Our Crucified Lord Naked and Bloody” をとりあげ、音や、発音時の口の形による情景描写、詩の内容の補足のあり方を紹介した。

最後に、Milton のソネット (“When I consider how my light is spent”) をとりあげ、そこで多用されている行またがりや行中休止の位置から音読のあり方を論証し、そして、「盲目という事実について考える --> 困惑し、頭の中が混乱する --> 忍耐が大切、という結論にたどりついて落ちつく」、というこの詩のシナリオが、その各行の組み方や音読時の雰囲気によって強調されていることを示した。このように内容と音声一致するこの詩に見るべきなのは、盲目という事実直面した「わたし」の動揺、ではなく、そのような動揺を生き生きと、ていねいに表現する冷静さ、芸術的な意識の高さなのである。

Reference

- Carper, Thomas, and Derek Attridge. *Meter and Meaning: An Introduction to Rhythm in Poetry*. London: Routledge, 2003.
- Hobsbaum, Philip. *Metre, Rhythm, and Verse Form*. London: Routledge, 1996.
- Leech, Geoffrey N. *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longmans, 1969.

(なお、本論考にもとづく論文「英語の詩を声に出して読み直す(1)——John Milton, Sonnet XVI (“When I consider how my light is spent”)」は、すでに『フェリス女学院大学文学部紀要』46 (2011): 145-81 に発表されている。)

Proceedings of the Fifth Colloquium

Aoyama Gakuin University, December 4, 2010

ミルトン痛苦の発声
——『政治権力論』について——

小林 七実

1659年2月16日に出版登録された *A Treatise of Civil Power in Ecclesiastical Causes* は、同年1月27日開催の議会に宛てられた。リチャード・クロムウェルが護民官就任の正当性を内外に示すねらいで召集したものである。護民官オリヴァー・クロムウェルによる解散から一年である。オリヴァーの護民官就任後退いた残余議会の議員達が加わる。ミルトンに外事長官の職を依頼したジョン・ブラッドショーや友人サー・ヘンリー・ヴェインらが復帰する。

護民官制下の高官として諸外国に向けた執筆活動に専心してきた筆者が自国に向け初めて書いた論文。表題は『信徒集団の諸理由の中にある政治権力について——地上の如何なる政治権力も信条に属する理由を強制することは神の法に反することを示す——』である（以下『政治権力論』）。

この時期、宗教事項を強制したのは、リチャードが議会召集に先立って命じたサヴォイ宗教会議（1658年9月29日）である。二週間後「サヴォイ宣言」がリチャードに提出される。会議を主導するのはクロムウェル派国定教会の独立派聖職者達である。この国定教会は護民官オリヴァーが設けた聖職者選定委員会（Triers：1654年3月）と聖職・教職者罷免委員会（Ejectors：同年4月）を通じて成立する。

独立派「サヴォイ宣言」は「ウェストミンスター信仰告白」（1648年10月議会承認）を踏襲する。「ウェストミンスター信仰告白」は1643年10月長老派議員が設けた宗教会議によって作成される。この会期中、少数独立派聖職者や会議参加が認められなかった諸宗派はこぞって反対する。各宗派の集会は宗教上の理由に基づき礼典を守り運営されるべきであり、特定の教義や礼拝方法を全信徒に強制し違反者を政治権力で罰してはならないとは、当時の独立派の立場である。国教会監督制を消滅させた長老派が自派国定教会を設立し他宗派を圧迫する。その二ヵ月後、プライド大佐率いる独立派軍隊が長老派議員を追放、議会を解散させる。

独立派議員で構成された残余議会は礼拝に関する処罰撤廃の「寛容法」（1650年9月）を施行する。ところが護民官制に移行後の議会は「謙虚な嘆願と助言」（1657年）によって、宗教上の処罰を含む全権限を護民官に与える。クロムウェル側近の独立派聖職者達はわずかな修正と序文を加え「サヴォイ宣言」を作る。かつて長老派が宗教規定の理由とし、独立派が反論した添付聖書箇所を全て削除し、政治権力による宗教上の強制や処罰をクロムウェル派国定教会は行わないと穏和な表現に書き換えている。

ミルトンが問題にするのはこの宣言が削除し修正した箇所である。いずれも政治権力に信徒処罰を委ねるために用いられた聖句と口実である。長老派の信仰告白に対する反論の形をとって、削除や修正で同じ意図を取り繕う偽りを明らかにする。国家権力は護民官やクロムウェル派上院議員ではなく選出された現議会にあることを示し議員に訴える。

当の議会構成はクロムウェル派上院60名、下院のクロムウェル支持議員約100名に対して、寛容法を採決した旧残余議会の復帰議員はわずか約50名である。宗教上理由からクロムウェル派国定教会に属さず十分の一税の支払いを拒否し投獄された信徒の釈放を求める請願書が議会に届いていた。議会はこれらの請願を無視し、逆に宗教規定違反や十分の一税未払いの罰則強化を議決する。

『政治権力論』は聞く耳を持たないこの議会に宛てて書かれた。事実上すでに消えてしまった共

和国の復活を信じ、護民官独裁議会に向かって発言する外事長官の焦慮と葛藤を伝えている。実現困難を充分に知りつつも「信条の規定は各会衆に属し、それに基づく諸教会の保護のみが国家統治者に属す」と説く。現在における信教自由の保障という政治原則を明確に述べている。政治と宗教の分離の先駆である。ここに今日的意義がある。

〈知恵〉をめぐって
—ミルトン『失樂園』第7巻からワーズワスへの啓発—

水野 薫

ワーズワスの詩人としての感性は、ミルトンとの精神的な繋がりによって推し量れると考える学者は多い。中でもジョナサン・ワーズワスは、1799年11月に書かれた *The Prelude* 1巻 “The earth is all before me” (I, l. 15) が *Paradise Lost* (PL) “The World was all before them” (XII, l. 646) から来ていることを取り上げ、1799年の終わりにワーズワスの詩作の勢いが持ち直してきた根拠とする。

しかし、別の角度から読むと、当時のワーズワスのミルトン引用は、自信よりむしろ当時のワーズワスの精神的迷走を露わにする。本発表では、最初書かれた wisdom の文字が *Home at Grasmere* 詩作の過程でペンで消された形跡をもとに、1800年から1805年のワーズワスの *Home at Grasmere* や *The Prelude* の前半のミルトン引用について再考した。そして、ミルトンへの深い敬愛が、むしろワーズワスの筆を鈍らせていた経緯について分析した。

まず、再考のための基礎となるミルトンからの引用は、1800年から1806年にかけて書かれたとされる *Home at Grasmere* の中の、PL 第7巻冒頭の invocation の引用である。*Home at Grasmere* は、グラスミアの大地を「エデンの木陰でさえ、得られなかった恵み」(ll. 123-25; なお *Home at Grasmere* の行数については以下も全て Stephen Gill, *Selected Poetry* に依る) とまで謳いあげる詩だが、その恵みこそミルトン神学の立場から言えば自然に臨在する神の知恵であるはずなのに、ワーズワスは “wisdom” という語はわざと抜いた形で、PL 第7巻の冒頭をここに引用している (ll. 973-79)。

また、鳥の描写も不可思議である。*Home at Grasmere* での鳥の描写は、神聖なまでに美しいロマン派の香りに満ちているものの (ll. 31-33, ll. 289-92)、PL 第7巻の鳥の描写 (VII, ll. 422-31) と対照させながら再読すると、説得力の欠如が感じられる。PL 第7巻での鳥の描写は、知恵についてより細やかに書かれている。鳥に理性があるかどうかはともかく、ミルトンは被造物である鳥の姿の中にさえ、神から与えられた理性と判断力を学び取ろうとする。この判断力のある生命を “very beautiful” と讃えるワーズワス (Wittreich 105) が “thoughtless impulse” を主たる要素にして鳥の描写をしあげているのは、彼の思索に何かねじれが生じているとしか考えられない。

次に、同時代に書かれた *The Prelude* の前半に的を絞った。1804年1月のワーズワスが PL 第1巻の混沌から天と地が生じる場面 (PL I, ll. 17-22) を *The Prelude* に引用する (I, ll. 150-54) とき、精霊 (神) が深淵を突くものに身ごもらせるとい PL の脈絡 (I, ll. 17-22) とは逆に、ワーズワスの詩は人間の判断力の混沌とした様相を示すようになっていき、むしろ、PL 第12巻, ll. 86-90 の内容に近い。

続いて、1804年の3月までには、ほぼ仕上がっていたであろうとされる *The Prelude* の第5巻を考察した。第5巻の ll. 1-3 では「理性」ということばが冒頭から明瞭に出てくるのが特徴である。理性がはっきりと自分の中で意識されているときでさえ、それはこの上なく心もとないという書き出しである。理性への迷いをいよいよ曝露している感が見て取れる箇所である。

最後に、再び鳥の描写をモチーフにして、*The Prelude* 第5巻を分析した (ll. 257-62)。引用箇所に含まれる「欠乏」: “destitute” という言葉はワーズワスが自分を形容する言葉としては稀有である——「全ての知識と愛の源であり要であった母鳥は、雛を欠乏の状態におとしめた」。ここでの “she” とは母鳥のことで、自分が幼少期に失った母と重ねている。彼の個人的な失樂園を思わせると言っても過言ではない。ここでも、PL 第7巻の秩序と思慮のある鳥からはかけ離れて、疑い

惑う鳥の姿が自身の過去と重ねられている。

以上の合点のいかない点に光を投げかけてくれるのが、例えば “in the blind and awful lair / Of such a madness[,] reason did lie couched”——「狂気の隠れ家とそこにうずくまる理性」（*The Prelude* V, ll. 151-52）に代表される、ワーズワスのショッキングなフレーズである。このジグソーパズルを想わせる、或いは劇的且つ強烈なイマジネーションは、*PL*の一般的解釈、思慮を通して理性に到達する智慧の模索に抗うものである。そのねじれが、ワーズワスの執筆活動を鈍らせていた可能性について指摘した。

（なお、別の観点から見ることで、ミルトンの中にワーズワスと酷似した智慧の概念があることを指摘したかったが、本発表ではそこまで言及できなかった。）

Works Cited

- Bush, Douglas. *The Portable Milton*. New York: Penguin, 1977.
- Cragg, Gerald R. *The Cambridge Platonists*. New York: Oxford UP, 1968.
- Milton, John. *Complete Shorter Poems*. Ed. John Carey. 2nd ed. London: Longman, 1997.
- . *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1974.
- . *Shorter Poems of John Milton*. Ed. B. A. Wright. London: Macmillan, 1952.
- Moorman, Mary. *William Wordsworth: A Biography; The Early Years 1770-1803*. New York: OUP, 1968.
- Newlyn, Lucy. *Paradise Lost and the Romantic Reader*. Oxford: Clarendon, 1993.
- Tillyard, E. M. W. *The Elizabethan World Picture*. New York: Knopf, 1961.
- Wittreich, JR., Joseph Anthony. *The Romantics on Milton*. Cleveland: P of Case Western Reserve U, 1970.
- Wordsworth, Christopher, D. D. *Memoirs of William Wordsworth, Poet-Laureate, D. C. L.* Vol. 1. London, 1851.
- Wordsworth, Dorothy. *The Grasmere Journal*. Ed. Pamela Woof. Oxford: Oxford UP, 1991.
- Wordsworth, Jonathan. *William Wordsworth: The Borders of Vision*. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Wordsworth, William. *The Excursion*. Ed. Sally Bushell et al. Ithaca: Cornell UP, 2007.
- . *The Five-Book Prelude*. Ed. Duncan Wu. Oxford: Blackwell, 1997.
- . *Home at Grasmere: Part First, Book First of the Recluse*. Ed. Beth Darlington. Ithaca: Cornell UP, 1977.
- . *The Prelude: The Four Texts*. Ed. Jonathan Wordsworth. London: Penguin, 1995.
- . *Selected Poetry*. Ed. Stephen Gill and Duncan Wu. New York: Oxford UP, 1998.
- Wordsworth, William, and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads and Related Writings*. Ed. William Richey and Daniel Robinson. Boston: Houghton, 2002.
- ミルトン、ジョン 『楽園の喪失』 新井明訳 大修館、1978年。

日本ミルトン協会規約

1. **名称** 本会は、日本ミルトン協会 (The Milton Association of Japan) と称する。
2. **目的** 本会は、日本ミルトン・センター (The Milton Center of Japan, 1975年7月18日－2008年3月31日) の事業と組織を継承し、ミルトン研究を促進することを目的とする。
3. **事業** 以上の目的を達成するために、次の事業を行なう。
 - (1) 研究大会
 - (2) 研究会
 - (3) 広報活動
 - (4) その他
4. **組織** 本会は、本会の主旨に賛同する者をもって組織する。
5. **役員** 本会に以下の役員を置く。役員を選出については付則に定める。

会長 1 名	事務局長 1 名
事務局委員 2 名	企画委員 6 名
ホームページ委員 2 名	会計監査委員 2 名
6. **機関**
 - (1) 総会
本協会の最高決議機関とする。議長は会長が務める。
 - (2) 運営委員会
運営委員会は、本協会の運営に関する事項を審議する。委員長は会長が務める。運営委員会は、以下の役員によって構成する。

会長	事務局長	事務局委員
企画委員	ホームページ委員	
 - (3) 事務局 事務局は、会計、機関誌の発行、その他の事務を担当する。
 - (4) 企画委員会
企画委員会は、研究大会・研究会等の企画を行う。
 - (5) ホームページ委員会
ホームページ委員会は、本協会のホームページの管理・運営にあたる。
 - (6) 顧問をおくことができる。
7. **会計**
 - (1) 会費 会員の会費は年額 5,000 円とする。ただし、学生会員はその半額とする。
 - (2) 会計監査
会計監査は、原則として年 1 回、会計監査委員が行い、運営委員会および総会に報告する。
8. **規約の改正** 本規約の改正は、総会における出席者の過半数の賛成によって実施する。

付則 役員選出

- (1) 会長は、運営委員会の推薦に従って、総会において選出する。任期は 3 年とし、再任を認めない。
- (2) 会長は、運営委員会に諮った上で、役員を任命する。
- (3) 事務局長は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は 1 期 3 年とし、最長 2 期とする。事務局委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任

期は1期3年とし、最長2期とする。

- (4) 企画委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は1期3年とし、最長2期とする。
- (5) ホームページ委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は1期3年とし、再任を妨げない。
- (6) 会計監査委員は、会長が会員の中から任命し、総会において承認する。任期は1期3年とし、再任を認めない。

9. この規約は、2008年4月1日から施行する。

The Articles of Organization of the Milton Association of Japan

1. STYLE

This association styles itself as the Milton Association of Japan (MAJ).

2. AIM

MAJ, as its predecessor the Milton Center of Japan, aims to develop the studies of the seventeenth-century English poet John Milton.

3. ACTIVITIES

In order to achieve the aim above, MAJ conducts the following activities:

- (1) Annual conference
- (2) Colloquium
- (3) Public relation activities
- (4) Other related activities

4. MEMBERSHIP

Anyone who is willing to share the aim above is eligible for membership.

5. EXECUTIVE STAFF

MAJ has the following executive staff:

- 1 President
- 1 Bureau Chief
- 2 Bureau members
- 6 Planning Committee members
- 2 Website Planning Committee members
- 2 Financial Auditors

6. ORGANIZATION

- (1) General Meeting: MAJ's highest decision-making body, whose chair is the President.
- (2) Steering Committee: Consists of the President (the chair), the Bureau Chief, Bureau members, Planning Committee members and Website Planning Committee members, and considers how to conduct MAJ's activities.
- (3) Bureau: Prepares publications; handles financial and other matters.
- (4) Planning Committee: Makes plans for annual conferences and colloquia.
- (5) Website Planning Committee: Creates and runs MAJ's website.
- (6) Advisers: Called in when necessary.

7. FINANCE

- (1) Membership fee: ¥5,000 (¥2,500 for student members)
- (2) Financial Audit: Made once a year and reported to the Steering Committee and the General Meeting.

8. CHANGES TO THESE ARTICLES

Must be proposed to the General Meeting and approved by a majority vote of those present.

ADDENDA

- (1) The President is recommended by the Steering Committee and elected at the General Meeting. The tenure is three years, and there is no reappointment.
- (2) The President appoints executive staff after consulting the Steering Committee.
- (3) The Bureau Chief is appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and the term limit is two terms (six years). Bureau members are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and the term limit is two terms (six years).
- (4) Planning Committee members are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and the term limit is two terms (six years).
- (5) Website Planning Committee members are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and there is no term limit.
- (6) Financial Auditors are appointed from MAJ members by the President and approved by the General Committee. The tenure is three years and there is no reappointment.

9. These articles come into force on April 1, 2008.